

善導における懺悔の研究

眞 田 慶 慧

本研究は、唐代初期の浄土教者である善導が著作中に示した実践行の一つである懺悔が、自身の掲げる往生を目的とする修道体系のどこに位置するのか明らかにすることを目的とする。善導の著作では、実践行として称名や観仏が示されるが、その中の一つに懺悔がある。懺悔は自己の犯した罪を滅するための行法であるが、治病や延寿等の現世利益的側面も併せ持つことから、善導当時には僧俗問わず流行していたことが明らかになっている。ところで、現在に至るまで善導研究は多岐にわたるが、その多くは法然や親鸞といった、浄土宗や浄土真宗に代表される日本浄土教の祖師の教学的視点から言及したものであり、中国仏教史上の善導という視点からの研究は多くない。また、善導の懺悔に関する研究についても、法然や親鸞の教学的視点から行われるものがほとんどであり、中国仏教史という視座のものは少ない。善導の懺悔に関する研究についても、当時の時代状況を考慮した上で検討する必要がある。

ここで、本論の構成を説明する。まず第一章から第三章にかけては、善導著作の中でも懺悔について詳しく述べられている『観念法

門』、『往生礼讃』、『法事讃』についてそれぞれ検討する。

まず、第一章では、『観念法門』で示される懺悔について、特に『観仏三昧海経』『本行品』引用に焦点を当て検討した。「本行品」は善導の師である道綽の『安楽集』や、善導と時代が近い道世や飛錫も引用している。しかし、道世や飛錫は該当箇所を観仏・念仏のために引用しているのに対して、善導は懺悔法を示すために用いる。さらに、引用箇所は異なるものの「本行品」を引用する道綽の目的は「勸信求往」を示すことにある。以上のように、道綽や道世、飛錫と引用態度が異なる善導だが、これは懺悔と往生行を結びつけるために必要な作業であったと言え、また、往生に関する内容を示すという点においては、善導も道綽や飛錫と同じ引用姿勢だったと言える。

続く第二章では、『往生礼讃』の懺悔について検討した。『往生礼讃』と似た構成の儀礼である「敬礼法」と『七階仏名』はそれぞれほとんど同じ内容の五悔の懺悔文を持つ。それに対して「略懺悔」は五悔という構造こそ同じものの内容は全く異なる。これは『往生

礼讃』において懺悔は「懺悔↓(回向)↓発願」という構造を想定したものであり、「略懺悔」の構造が基本となるためである。なお、善導著作中、『往生礼讃』は浄土願生者により日常的に行われることを想定し作成された儀礼である。そして、本書に説かれる懺悔文の中で最も内容が難しい「広懺悔」に対し、「略懺悔」は民衆が親しみを持てるような構造や語句を持つ、初歩的な位置のものと言える。

第三章では『法事讃』の懺悔について、特に地獄の詳述に着目し検討した。善導著作における懺悔と地獄に関する記述について確認すると、懺悔と地獄を関連させて述べるのは『法事讃』のみである。それに加えて、『法事讃』の懺悔文では地獄經典として理解される『正法念处経』に頻出する「楽行多作」という語句が見られることから、善導が意図して懺悔と地獄を関連付けていたことがわかる。「憶我清浄」とあるように、懺悔とは罪を発露することで自身を清浄な状態にするものである。ゆえに、懺悔の成立において、自身の罪果として説かれる地獄を詳説することは必要であり、また、『法事讃』という別時儀礼において、参加者が自身の罪をより深く理解し懺悔を実践するためにも、地獄を詳説することは重要だったのである。

以上の内容を踏まえ、第四章と第五章では善導の修道体系のどこに懺悔が位置しているのか明らかにした。まず第四章では、『般舟讃』を除く善導著作では「懺悔↓往生行」という構造が想定されて

いることを懺悔の用例から確認した。すなわち懺悔は往生行には含まれないものの、往生行の前提となるものとして位置しているということである。また、善導著作上で「懺悔」は罪を告白する行として用いられる場合がほとんどであり、「懺悔」と「慚愧」は同義のものとして扱われていないことが明らかになった。

最後に第五章では、『往生礼讃』で語られる「安心・起行・作業」という修道体系のうち、特に安心との関係について着目し検討を行った。至誠心は「真実心」と定義されるが、至誠心が成立していない状態ではどれだけ安心・起行を起こそうとしたとしてもすべて雑毒の善となるという。至誠心が成立しない状態とは、自身の内が「貪瞋邪偽奸詐百端」であることであり、この状態を解消するためには、「貪瞋煩惱來問。随犯随懺」と罪を犯すたびに懺悔をし清浄であろうとすることが必要なのである。以上のことから「懺悔↓至誠心」という構造が考えられる。深心は特に衆生の罪悪性を深信するという項目が懺悔と関係していると考えられる。また、往生行ではない懺悔は阿弥陀仏と関連性がないように思えるが、両者の関係についても衆生の罪悪性についての深信から検討できる。すなわち、懺悔によって衆生は自身の罪悪性を深信し、その結果阿弥陀仏の救済性を深信するようになり、また阿弥陀仏の救済性があるからこそ衆生は自身の罪悪性を自覚し、それによって懺悔するのである。以上のように、深心を介しての循環的な関係が懺悔と阿弥陀仏の間にあると言える。最後に、回向発願心について、この心は至誠心と深

心によって成立するものである。また、至誠心と深心の成立に懺悔は重要なものであることは先に確認した通りであり、ゆえに回向発願心成立についても懺悔が間接的に関わっていると言える。

最後に、本研究の結論と成果、課題について述べたい。本研究は、善導の掲げる、往生を目的とする修道体系のどこに懺悔が位置するのか明らかにすることを目的としていた。また、中国仏教史上での善導という視点に着目し、このことをできる限り考慮し検討してきた。当時の善導が活動した周辺の地域では、懺悔は行として理解されていたことは確認した通りである。この意味では、善導著作に見られる、懺悔を行為として示す内容は一般的な理解であつたと言える。ただし、ただ懺悔を取り入れるのではなく、懺悔を通して浄土教儀礼に親しみが持てるよう工夫する姿勢は善導独自のものといえよう。また、自身の罪悪性を通して阿弥陀仏への信仰心を深め、往生の助けとなるよう位置づけられている懺悔は、善導の修道体系上必要なものであると言えるよう。